

方丈記 第一回

流れ行く河の水は、つねに絶え間なく流れて、しかも、二度と同じ水が流れることはない。よどみに浮かぶ泡なども、消えては生まれ、生まれては消え、けっして一つのところにいつまでもとどまっている泡はない。この世を生きる人や、人が棲むさまもそれと同じこと。

玉を敷き詰めたような美しい都に建ち並び、それぞれが薨の高さを競い合っているかのような、身分の高い人々の屋敷や、あるいは貧しい人の住まいなども、ずっとそこに変わらざにあるもののようにみえるけれども、本当にそうかといえ、よく見れば、昔から変わらずにそこにあり続ける家などというものは、めったにはない。

去年に燃えて、今年になって新しく建てた家もあれば、もともとは大きなお屋敷だった家が、いつのまにか、小さな家になっていたりもする。棲む人についても同じで、同じ場所に変わらずに住み続けている人も少なくはないけれども、そんな人というのは、二、三十人の中に、せいぜい一人か二人に過ぎない。

朝に死ぬ人もいれば、夕べに生まれてくる人もいて、それが人の世というものだけれども、それはまさしく、どこからかともなく生まれて、そしてどこへともなく消える水の泡に似て、どうしてかはわからないけれども、人はこの世に生を受け、そしてやがてあの世へと逝く。つまりこの世は、仮住まいのようなものにはすぎないのに、それでも誰かのことを想って心を悩ませ、何かを見て嬉しく思ったりもする。

そんなふうの人が、仮住まいに過ぎない無常のこの世で、一生懸命、住まいがどう、自分がどうと争い合うようすは、言ってみれば、まるで朝に花を咲かせる朝顔と、その花の上の朝露との関係にも似ている。

花から露が落ちて、花が残ることもあり、陽が昇りやがて花が萎んでしまってもなお、露が消えずに残ったりすることもあるけれども、それでもどちらも夕方まで、朝と同じようであり続けることはない。